

## スターチスのオリジナル品種を育成中!

### 1. はじめに

本県ではスターチス・シヌアータの栽培が盛んに行われており、栽培面積73haと全国1位の産地を形成しています。定植は8月下旬～9月中旬にかけて行われ、10月～翌年6月頃まで全国各地に出荷されています。スターチス生産では、経営費に占める種苗費の割合が大きいことが経営上の課題となっています。当センターでは、栽培許諾料の低減と自家育苗による種苗費の削減や特性の優れた品種の導入による所得向上を目的にオリジナル品種育成に取り組んでおり、現在8品種、約7ha（定植株数を3,000株/10aとして、苗の供給量から換算、平成29年産）が作付けされています。ここでは、現在の品種育成の取り組み状況をご紹介します。

### 2. 目標とする品種特性

#### (1) 低温管理栽培で収量性の高い品種

近年の重油価格高騰以降、産地では経費を抑えるために無加温または加温温度を1～3℃程度とする低夜温管理で栽培されることが多くなっています。しかし、低温管理では需要期である3月彼岸までの収量が少なくなることから、このような温度管理においても、収量性に優れる品種の育成を行っています。今年度は昨年度に高い評価が得られた系統について、センター内での栽培試験と現地試験を実施し、品種登録を目指します。



図1 ブルー系有望系統

#### (2) 低温要求量の少ない品種

スターチスが開花するためには、低温に遭遇することと低温に遭遇した幼苗が高温に遭わないことが必要となります。本県の作型では育苗期が高温となるため、自家育苗する際、冷房施設で温度を制御して育苗しており、育苗コストが大きくなります。また、定植後の高温による収量低下も懸念されます。そこで、冷房育苗をしなくても収量が確保できる品種の育成を進めています。



図2 交雑実生からの一次選抜  
※抽苔の早い個体を選抜

#### (3) 萎凋細菌病に強い品種

萎凋細菌病は防除が難しく、病気が進行すると株が枯死し大幅な減収につながるため、スターチス栽培では大きな問題となります。このため、萎凋細菌病に強い品種の育成に取り組んでいます。現段階では、育種素材となる萎凋細菌病に強い品種や系統の探索と作出、効率的に萎凋細菌病に強い個体を選抜する方法を検討しています。

### 3. おわりに

品種育成には長期間を要しますが、効率的な選抜法や選抜の早い段階での現地試験の実施などにより、迅速に消費ニーズと産地の栽培ニーズにあった品種育成を図っていきたいと考えています。

(育種部 宮前 治加)